埼玉学園大学・川口短期大学　機関リポジトリ

Proposal for Using English Method in Music Classes at Junior High School : Through Practical Classes Incorporating Singing Expressions and Language Activities in English

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2022-02-18
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 宮澤, 多英子, MIYAZAWA, Taeko
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1391

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

中学校音楽科授業における英語活用方法の提案
――英語による歌唱表現及び言語活動を取り入れた授業実践を通して――

宮　澤　多英子

Proposal for Using English Method in Music Classes at Junior High School:
Through Practical Classes Incorporating Singing Expressions and Language Activities in English

MIYAZAWA, Taeko

Abstract: In recent years, globalization has progressed rapidly, and the number of subject classes using English is gradually increasing. In the future, it will be necessary in the music classes to create class content in cooperation with English classes from a cross-curricular perspective. According to this trend, the purpose of this research is to clarify the effective use of English for music classes in junior high school. This research has been conducted using practical methods. First, I planned practical music classes, which incorporated two points of using English: singing expressions and language activities. These points were practiced. Next, I analyzed the practical classes to verify the effects of using English. As a result, through analyzation and verification, it became clear that the incorporated singing expressions in English was effective for understanding the diversity of music. It was also suggested that incorporating English into other familiar things students might gain more effective use of English in music classes at junior high school.

Key words: practical research, using English, subject content of music, cross-curricular

Ⅰ　研究の目的と方法

1. 問題の所在

近年，グローバル化が急速に進展し，これからの時代では，外国語でのコミュニケーション能力が生涯にわたる様々な場面で必要とされることが想定される（文部科学省，2018a，p. 5）。このような新しい時代に生きる資質・能力の育成のために，中学校においても国際バカロレアやイマージョン教育の導入が推進され[(1)]，英語を用いて教科教育を行う授業実践も徐々に増加している。また，平成29年告示の学習指導要領においてカリキュラム・マネジメントの推進が示されたことで（文部科学省 2018a，p. 5），今後，教科横断的な視点から外国語科と連携した教科教育の内容を組み立てていくことが求められるようになるだろう。

音楽科においては長年，英語を含む外国語の歌唱曲が教材として教科書に掲載されており，英語による歌唱表現や英語の歌唱曲の鑑賞など，英語を用いた教科教育が実施されてきた。このような英語活用は，音楽科の目標である「音楽の多様性の理解」に対して一定の役割を果たしているだろう。しかしながら，グローバル化が益々進展するこれからの時代に必要な資質・能力の育成という視点から，この「音楽の多様性の理解」を身につけることを目指した場合，単に音楽が多様であるという理解に留まらず，音楽を人々の営みと共に生まれ，発展し，継承されてきた文化として捉えた上でその多様性を理解することが不可欠となる。そのためには，現状の音楽科における英語活用を再検討する必要があるだろう。また，音楽科として教科横断的な視点から外国語科[(2)] と連携した教科内容を構築していくためにも，音楽科授業においてどのような英語活用方法が有効なのか，という視点は必須であると考える。

2. 研究の目的と方法

本研究では，中学校音楽科授業において有効な英語活用とはどのようなものかを，英語を活用した授業実践を通して明らかにすることを目的とする。

研究の方法については，実践的方法をとる。まず，中学校音楽科授業における先行研究を検討し，英語活用の現状と課題について整理する。その上で，英語活用を取り入れた中学校の音楽科の授業実践を計画し，実施する。次に，授業記録，ワークシートの記入内容，授業後のアンケートを分析し，取り入れた英語活用の有効性について検証する。最後に，分析と検証結果から，音楽科授業における英語活用方法について提案を行い，音楽科授業における英語活用の可能性について考察する。

3. 先行研究の検討

英語活用を取り入れた中学校音楽科の授業実践を扱った研究について，先行研究の検討を行った。まず，グローバル人材育成を目指した音楽科授業開発の研究として，伊藤真とフェラン・ガリシア・ジュゼプ（2019）による中学校音楽科授業における内容言語統合型学習（CLIL）[(3)] の実践的研究を挙げる。この研究は，近年徐々に増えつつある，英語を用いて音楽科教育を行う授業実践を扱っている。授業実践では，全4時間のうち後半の2時間を外国人教師主導で英語を用いて行い，演奏技能の上達，表現の工夫及びアンサンブルの形成を主な指導内容として器楽表現授業を実施している（伊藤・ジュゼプ，2019，pp. 15-22）。実践では，学習の対象となる「音楽」が言葉を介さずとも共有できるという教科の特性から，言葉以外のジェスチャーや音そのものに

よって技能や音楽的表現の工夫が向上・洗練されたと述べられている（伊藤・ジュゼプ，2019，p. 22）。一方，コミュニケーションに関する学びについては，生徒の「英語レベルがある程度に限定されることから，授業を総括する場面で教師が複雑な考えや気持ちを生徒に伝えようとしてもうまく伝わらなかった」（伊藤・ジョゼプ，2019，p. 22）ことから，「日本語で気持ちを伝えることの重要性を再認識する契機となった」（伊藤・ジョゼプ，2019，p. 22）と述べられている。CLIL では，科目内容を指導しながら必要な外国語の言葉を教えることが指導に必要とされており，科目を指導する教師は，生徒が見落としがちな科目の内容を困難にする言葉の知識を補って，学習を支援する必要があると指導のポイントが挙げられている（笹島，2011，p. 13）。伊藤とジュゼプの研究では，生徒が学習対象となる楽曲に対して知覚・感受[(4)] した内容や，知覚・感受したことと関わらせて表現を工夫した経緯など，音楽科の学びの本質につながる「音楽的な見方・考え方」[(5)] に関して，英語を用いて授業を行う中で指導者がどのように把握したのか，また，生徒間でどのようにやりとりが行われたのかについては述べられていない。つまり，音楽科授業における「科目の内容を困難にする言葉の知識を補う」必要がある部分は，この音楽的な見方・考え方に関わる言語活動であると考えられる。伊藤とジュゼプの先行研究からは，音楽科の学びの本質につながる「音楽的な見方・考え方」を伝えたり共有したりする言語活動が，英語によって教科科目の学習を行うことを目指す CLIL やイマージョン教育では課題となることがうかがえた。

次に，英語科教員 2 名と音楽科教員 1 名のティームティーチングによって環境教育と英語による歌唱表現活動を行った授業実践を扱った，時得紀子，中村浩，水谷桂介（2009）によるクロスカリキュラムの学習方法に関する研究を挙げる。この授業実践では，全 5 時間のうち後半の 2 時間で環境問題に関する英語の歌が歌われている。「音楽科単独の教科学習の学びからは生まれない，文化と表現を丸ごと体得できる」（時得・中村・水谷，2009，p. 10）授業を目指したとされるこの実践では，英語科と音楽科の授業者全員が音楽の習得には異文化理解の学習が欠かせないという共通の認識を持っており，それが実践を可能にしたと述べられている（時得・中村・水谷，2009，p. 16）。このことからは，英語科との連携を図ることが，音楽文化の多様性の理解につながる可能性や，連携する英語科教員と共通理解を図ることの必要性がうかがえた。

以上 2 つの先行研究は，CLIL やクロスカリキュラムの枠組みでの授業開発や学習方法を目的としたものであるため，音楽科授業における英語活用に焦点を当てた本研究とは異なる。しかしながら，中学校音楽科授業における英語活用として，音楽的な見方・考え方に関わる言語活動では母語を用いること，英語科教員と教科等横断的な授業を行う場合には音楽科としての英語活用のねらいや目標について共通理解を図ること，以上 2 点について，本研究の授業実践に対する示唆を得た。

Ⅱ　授業実践の計画と概要

1. 授業実践の計画

先行研究の検討を踏まえ，英語活用を取り入れた授業実践の計画を行った。計画に際しては，英語を活用することで音楽科としての学習内容をさらに深めることのできる授業を計画することを目指した。そのため，本研究では一から授業実践を計画するのではなく，カリキュラム・マネジメントの視点から[(6)]，2019 年度に筆者が担当する中学校音楽科授業の年間指導計画の中で，英語活用を取り入れることで音楽科としての学習を深めることのできる授業内容があるかどうかを検討することにした。検討の際には，音楽や音楽文化の多様性の理解が目標となる内容で，外国語科の中学校学習指導要領解説において音楽科と連携した言語活動の一例として示されている「我が国や郷土の伝統音楽及び諸外国の様々な音楽の特徴と，その特徴から生まれる音楽の多様性」（文部科学省，2018a，p. 88）に関連する単元や教材に注目した。また，「我が国と諸外国の音楽の特徴を比較する内容」や，「音楽の多様性を理解する内容」を深めるために英語を活用していく学習活動となるよう，鑑賞だけでなく表現の学習内容も含めて検討を行った。

検討の結果，日本語の唱歌である『仰げば尊し』を教材とする英語活用の授業実践を行うことにした。この教材は，実践校の卒業式[(7)] で毎年歌われ，中学校第 3 学年の 3 学期に扱うものである。当初の年間指導計画では，「思いを込めて卒業の歌を歌おう」という単元として扱う予定であった。この単元を，教材のルーツがアメリカの歌唱曲とされている点を生かし，「卒業式での歌唱表現」という音楽文化をグローバルな視野から捉えることを目的とする単元に授業改善を行った。学習指導計画の概要を以下に示す。授業実践の指導者は筆者である。

［単元名］　儀式と音楽との関わりを理解して卒業式の歌を歌おう
［対　象］　A 女子中学校第 3 学年 18 名 1 クラス[(8)]
［実践日］　令和 2 年 2 月 8 日（土），15 日（土）
［教　材］　『仰げば尊し』『Song for the Close of School』[(9)]『巣立ちの歌』『果てない空』
［単元目標・評価規準］[(10)]
観点 1　知識・技能
・曲の背景にある文化や歴史によって歌詞の内容が多様であることや共通する内容があることを理解した上で，曲にふさわしい発音や発声法で歌う。
観点 2　思考・判断・表現
・歌詞の内容と曲想とのつながりを感じ取り，卒業式の歌に対してどのような思いを込めて歌

表 1　指導計画

時	学　習　活　動
1	・日本では古来より儀式の中で音楽が用いられてきたことを知り，なぜ儀式で音楽を演奏するのか，なぜ卒業式で歌唱するのか，意見を出し合う。
	・卒業式で歌唱する既習曲の『校歌』『巣立ちの歌』『果てない空』を歌う。 ・『仰げば尊し』の音取りをする。 ・『仰げば尊し』の曲想について意見を出し合う。 ・『仰げば尊し』のルーツとされる『Song for the Close of School』を英語で歌う。
	・次回の授業までに，アメリカ人の英語科教員にアメリカでの卒業式の歌唱について質問をする，英語による言語活動を行う。
2	・『仰げば尊し』の日本語の歌詞の内容や，『Song for the Close of School』の発音と歌詞の意味を理解する。
	・『仰げば尊し』『Song for the Close of School』を歌う。 ・アメリカ人の英語科教員への質問の回答を発表し合い，日本とアメリカにおける卒業式と音楽との関わりを比較する。 ・『仰げば尊し』と『Song for the Close of School』の歌詞の内容の違いや共通点について意見を出し合う。
	・卒業式で『仰げば尊し』をどのような思いを込めて歌いたいかについて，自分の意見をまとめる。

いたいかを考える。

観点 3　主体的に学習に取り組む態度

・儀式における音楽の役割に興味をもち，卒業式での歌唱表現に向けて意欲的に取り組む。

［指導計画］　表 1 参照

本実践で取り入れた英語活用は，①『仰げば尊し』のルーツとされる英語の歌唱曲『Song for the Close of School』を歌唱すること，②アメリカ人の英語科教員にアメリカでの卒業式の歌唱について英語で質問すること，以上 2 点である。①は，『Song for the Close of School』と『仰げば尊し』を比較しながら歌うことで，同じ旋律であってもそれぞれの背景にある文化や歴史によって歌詞の内容が多様であることを理解することや，文化や歴史が違っても卒業に対する共通する思いが歌われていることを感じ取ることに有効であると考えて設定した。②は，音楽の多様性について理解する（文部科学省，2018b，p. 9）という音楽科の目標と，外国語の背景にある文化に対する理解を深める（文部科学省，2018a，p. 14）という英語科の目標の両方に対して有効な学習活動であると考えて設定した。

2. 授業実践における教科連携の概要

授業実践を行うにあたり，実感の伴った音楽文化の多様性の理解を目指して，英語科と連携した教科横断的な学習活動を設定した。言うまでもなく英語は，英語を母語とする英語圏諸国の人々の営みに欠かせない言語文化であり，その国の音楽文化とも密接な関わりがある。英語を用いて英語圏諸国の生活経験者とその国の音楽や音楽文化を語り合うことは，英語圏諸国の文化の

中に自ら入り，その中で英語圏諸国の音楽や音楽文化を理解していく経験ともいえるだろう。こういったアプローチは，音楽を人々の営みと共に生まれ，発展・継承されてきた文化として捉えた上での音楽の多様性の理解につながると考えられる。

そこで，授業対象学年の英語科授業を担当するアメリカ人の英語科教員Ｅ氏に授業実践への協力を依頼した。但し，本研究の授業実践は音楽科単独の研究授業として実施したため，英語科授業との連携は実現せず，授業外で英語科教員と生徒が英語を活用した取り組みを行うという方法をとった。授業実践の協力者であるＥ氏は，教員や生徒とのやりとりには通常英語を用いている。そのため，英訳した学習指導計画を提示したり口頭での確認を行ったりすることで，授業実践の目標と計画の共通理解を図った。また，生徒がＥ氏に英語で質問する際に使用する質問シートは，筆者が項目を作成し，英語の文章表現についてはＥ氏の助言を得た。

Ⅲ　授業実践の分析と検証

1. 分析の視点と対象

授業実践後，①『仰げば尊し』のルーツとされる英語の歌唱曲『Song for the Close of School』を歌唱すること，②アメリカ人の英語科教員にアメリカでの卒業式の歌唱について英語で質問すること，これら２点の英語活用が，音楽科授業において有効であったのかを明らかにするため，対象生徒や協力者である英語科教員が２点の英語活用をどのように捉えたのかを分析した。分析の視点は，英語活用を取り入れたねらいをもとに設定し，①の「英語による歌唱表現」に対しては，㋐楽曲の背景にある文化や歴史によって歌詞の内容が多様であることを理解することに有効であったか，㋑文化や歴史が違っても卒業に対する共通する思いが歌われていることを感じ取ることに有効であったか，②の「英語による言語活動」に対しては，㋒音楽の多様性について理解することに有効であったか，㋓外国語の背景にある文化に対する理解を深めることに有効であったか，以上４点とした。本文中，それぞれの視点を㋐～㋓で示す。

分析の対象は，授業記録，ワークシートの記入内容，授業後の生徒へのアンケート，授業後の英語科教員Ｅ氏へのアンケート，以上４点とした。生徒へのアンケートは，対象生徒が授業で使用している Google Classroom に Google Forms を使用した Web アンケートを配信して実施した[11]。また，Ｅ氏へのアンケートは英語で項目を作成し，英語で回答を記入してもらう方法で実施した。

2.「英語による歌唱表現」に対する分析と検証

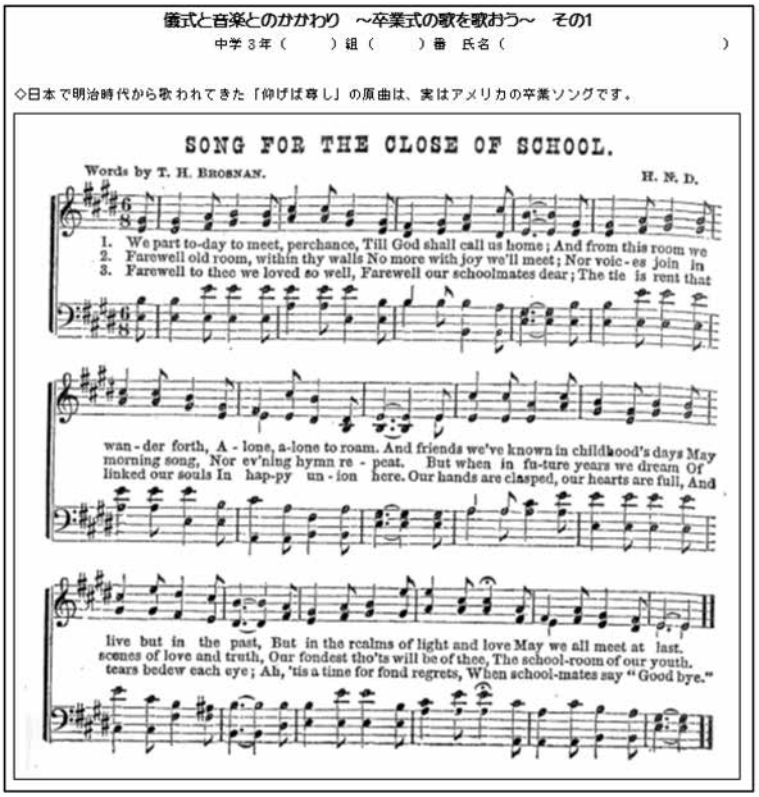
本実践で扱った『仰げば尊し』は，授業実践校で歌い継がれてきたことから，生徒は曲に対し

て関心をもち，歌うことへの期待を感じていることが推測できた教材である。授業記録においても，歌う前から何人かが歌い出しの旋律を口ずさむ様子もみられ，生徒は最初から戸惑いなく『仰げば尊し』を歌っていた。本研究における英語の歌唱教材は，この楽曲のルーツとされる歌唱曲であり，旋律が『仰げば尊し』と同一であるため，生徒にとって関心のある楽曲に英語の歌詞が付いているとも捉えられる教材である。

第1時の授業では，生徒が授業で初めて『仰げば尊し』を歌い終わった直後に，曲を歌って知覚・感受した内容について意見を出し合った。その場面の授業記録からは，指導者が発言者を指名することなく，6人の生徒が次々と自分から意見を言う様子がみられた。そして，曲想を自分自身の気持ちと関わらせて捉えたことを表すような「別れるんだな…」という意見もみられた。当初の年間指導計画では，こういった曲想と歌詞の内容に自分自身の思いを関わらせて気持ちを込めて歌えるように指導することまでを単元目標としていた。

本実践はさらにここから，1つ目の英語活用として『仰げば尊し』のルーツとされる『Song for the Close of School』を歌唱する活動を行った。授業記録では，曲想についての意見を出し合った後，指導者が教科書に記載のある「作詞作曲者不詳」に関して生徒に問いかけている。すると，生徒Rが曲を作ったのが「外国人な感じがする」と発言し，旋律が外国の音楽に聴こえるという意見を出した。それを受けて指導者が，図1に示した英語の歌詞が書かれた楽譜のシートを配布すると，表2のS23[(12)] とS24にあるように，生徒が自主的に英語の歌詞を読んだり，S25にあるように，英語の歌詞で旋律を口ずさんだりする様子がみられた。英語があまり得意ではない生徒もいる中，英語で歌うことに対する戸惑いの発言や態度はみられなかった。そして，指導者が英語の歌詞で口ずさんでみることを促し（T24），全体で英語の歌詞での歌唱が終わった後，生徒からは「おおー」という声がおこり（S29），生徒が口々に「すっご！」「すごい」といった発言をしている（S30）。このように，英語歌唱に主体的に関わり，日本の歌唱曲のルーツに触れた感動や同じ旋律に英語の歌詞と日本語の歌詞があることに対して，興味・関心を示す反応が生徒にみられた。この場面からは，分析の視点㋐と㋑につながる前段階として，教材への興味や関心が高まっている様子が読み取れた。

続く第2時に使用したワークシートでは，11名が『仰げば尊し』と『Song for the Close of School』の歌詞の内容の違いと共通点両方を記入したことが確認でき，視点㋑が認められた。図2に記入例を示す。さらに授業記録からは，表2のS61にあるように，「each eye（互いの瞳）」という歌詞の部分を歌っている最中に，生徒Kが隣の生徒と顔を見合わせて笑顔で歌う様子や，「say “Good bye”（さよならを言う）」という歌詞の部分で同じように顔を見合わせて「Good bye」と歌う様子がみられた。別の生徒では，歌い終わった直後に歌詞の「Good bye」の部分を口ずさむ様子もみられた（S63）。



儀式と音楽とのかかわり　～卒業式の歌を歌おう～　その1

中学３年（　　）組（　　）番　氏名（　　）

◇日本で明治時代から歌われてきた「仰げば尊し」の原曲は、実はアメリカの卒業ソングです。

SONG FOR THE CLOSE OF SCHOOL.

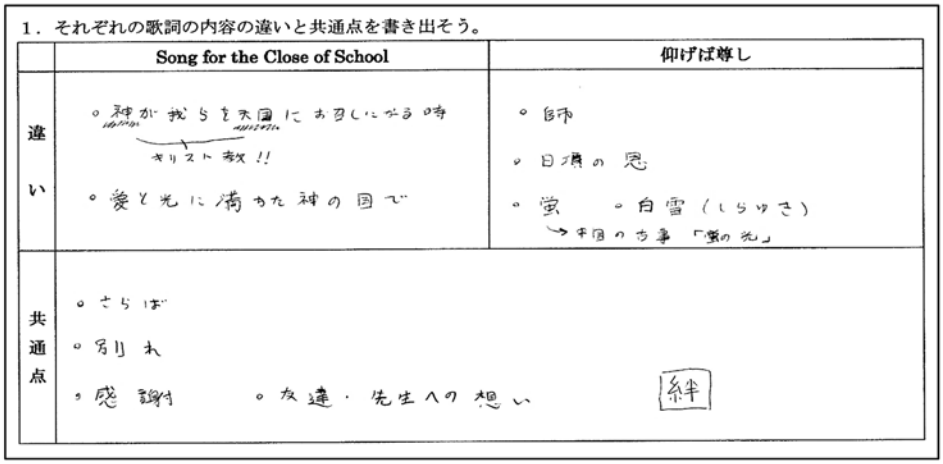
Words by T. H. BROSNAN.　　H. N. D.

1. We part to-day to meet, perchance, Till God shall call us home; And from this room we
2. Farewell old room, within thy walls No more with joy we'll meet; Nor voic-es join in
3. Farewell to thee we loved so well, Farewell our schoolmates dear; The tie is rent that

wan-der forth, A-lone, a-lone to roam. And friends we've known in childhood's days May
morning song, Nor ev'ning hymn re-peat. But when in fu-ture years we dream Of
linked our souls In hap-py un-ion here. Our hands are clasped, our hearts are full, And

live but in the past, But in the realms of light and love May we all meet at last.
scenes of love and truth, Our fondest tho'ts will be of thee, The school-room of our youth.
tears bedew each eye; Ah, 'tis a time for fond regrets, When school-mates say "Good bye."

図１　英語歌唱に使用したシート（一部抜粋）



１．それぞれの歌詞の内容の違いと共通点を書き出そう。

	Song for the Close of School	仰げば尊し
違い	◦神が我らを天国にお召しになる時 キリスト教!! ◦愛と光に満ちた神の国で	◦師 ◦日頃の恩 ◦蛍　◦白雪（しらゆき） →中国の古事「蛍の光」
共通点	◦さらば ◦別れ ◦感謝　◦友達・先生への想い　絆	

図２　ワークシート記入例

表２　授業記録（一部抜粋）

S22	配布されたワークシートの英語歌詞の楽譜を見ながら「あ，ほんとだわ」
S23	英語の歌詞の歌いだしを読む「We part...」という声がする。
S24	「アメリカ卒業ソング」という声，生徒が口々に英語の歌詞や英語のタイトルを読む。
T20	「アメリカの卒業ソングっていうことが分かったの。」
S25	複数の生徒が，英語の歌詞を口ずさんで歌い始める。
T21	「Song for the close of school，みんな，クローズって何？」
S26	「えっ？」「閉じる？」口々に答える。
T22	「そう，この歌は，学校の閉じるための歌ってことは？」
S27	口々に歌詞を読んだり，旋律を口ずさんだりする。
T23	「卒業の歌だよね。」
T24	ピアノに近づきながら「ちょっとさ，一番だけ口ずさんでみようか？」と言い，歌いだしの音と和音を弾く。
S28	指揮者による歌詞の歌いだしの指示と共に，英語の歌詞で歌う。最初は戸惑う様子の生徒も，徐々に集中して歌いだす。
S29	歌い終わると，「おおー」という声が生徒全体からおこる。
T24	「メロディ，全くいっしょなの。」
S30	「すっご！」「すごい」と数名の生徒が口々に言う。
	～中略～
S58	生徒が立ち上がる。すでに「あおげばーとうとしー」と歌を口ずさむ生徒がいる。
T53	ピアノの前奏を弾き，「あおげば」と歌詞の歌いだしを少し早めに伝える。
S59	生徒は集中して歌いだす。そのまま１番と３番を通して日本語で歌う。
T54	曲の流れを止めずに，「Farewell to thee」と英語の３番の歌詞の歌いだしを少し早めに伝える。
S60	英語の歌詞で一通り歌う。生徒は集中してのびやかに歌っている。
S61	生徒Ｋが，歌詞の「each eye」で隣の生徒と二人顔を見合わせて笑顔で歌う。同じく，「say "Good bye"」の歌詞でも同じように顔を見合わせて笑顔で歌う。
S62	最後のフレーズで戸惑って笑う生徒が２，３名いる。
T55	ピアノの伴奏が終わってから，「あれ？どっかでずれた？」
S63	「ずれてなーい」と一人の生徒が言う。別の生徒が，座りながら「Good bye」の歌詞の部分を口ずさむ。

このことからは，『Song for the Close of School』にも『仰げば尊し』と同じように，分析の視点④にある，卒業に際した気持ちが歌われていることを感じ取り，曲に込められた共通する思いを感じ取って歌った様子がうかがえる。顔を見合わせて歌っていたS61の生徒２人が授業後に記入したワークシートでは，「卒業式では『仰げば尊し』にどのような思いを込めて歌いたいですか」という質問に，「さようならと感謝の気持ちをこめる」「みんなとの思い出を思い出しながら歌いたい」と記入されていた。そして，この生徒２人が単元を振り

Teacher's name: (　　)

"Can we ask questions about your music assignments?"

1. Do you know this song? Please listen.　♪Students Sing "仰げば尊し".

"This song is famous Japanese graduation song. Traditionally, we will sing it at the graduation ceremony. Actually, this song is originally a graduation song of the U.S.

2. Do American students often sing this song at high school graduation ceremonies too?

3. Usually, what do students sing at high school graduation ceremonies in the U.S?

4. Why do you think people sing songs at graduation ceremonies?

"Thank you for your cooperation."

図３　英語による言語活動用に配布したシート

返った感想には，「日本で歌われている曲がアメリカでも歌われていておどろいた」「卒業式にぴったりな歌で心をこめて歌いたいと思いました」と書かれており，卒業の歌に対する視野が広がったり，卒業式でこの曲を歌唱することに対する思いが深まったりした様子が読み取れた。よって，ワークシートと授業観察の両面から，視点㋑が認められた。

その他の生徒のワークシートの内容にも，「日本語の仰げば尊しと，英語が違う意味でおどろきました。違いを見つけるのも，共通点を見つけるのも，とてもおもしろかったです」「日本の卒業式の歌以外を聞いたことがなかったので，とても新鮮でした。国が違うだけで歌詞の内容がこんなに違うんだととてもおもしろいと思いました」「文化など変わりつつあるけど，歌も時代によって歌わなくなったりするなど変化することがビックリした」など，一重線の下線部のように音楽の文化的背景に対する感想がみられたり，破線の下線部のように音楽の歴史的背景に対する感想がみられたり，授業を通して音楽の多様性を感じ取ったことが読み取れ，分析の視点㋐が確認された。また，授業後のアンケートでは，6 人が「『仰げば尊し』の英語の歌詞と日本語の歌詞の内容の違いと共通点について」今回の授業で興味を持ったと回答し，選択肢の中で最も多い回答となった。よって，アンケート結果からも，ワークシートと同様に，楽曲の歌詞にみられる音楽の文化的背景に対して興味を持ち，その多様性を感じ取ったことが読み取れる結果となり，分析の視点㋐が認められた。

3.「英語による言語活動」に対する分析と検証

2 つ目の英語活用は，教科横断的な視点から英語科と連携した教科内容を実現することを目的としたものである。本授業実践の協力者である E 氏は，対象生徒の多くが授業や生活の中で英語を介して会話をしたことのある，ネイティブスピーカーの英語科教員である。よって，本研究において扱う英語による言語活動は，音楽科の学習内容に関連する質問を，生徒にとって身近なネイティブスピーカーの英語科教員と行う言語活動である。

授業計画の段階では，対象生徒の半数ほどが興味を示して質問しに行くことを想定していたが，第 1 時の授業で言語活動について説明した際に「いやだよー」と一人の生徒から声があがり，授業外で行う任意の課題としたことも影響し，2 名の生徒のみが英語による言語活動を行った結果となった。また，授業で英語科教員の回答について，その内容を発表したのは，生徒 F のみであった。いっしょに質問に行ったのは生徒 K で，この 2 人は授業後のアンケートで，「授業の課題として E 先生に質問に行ったことは，自分にとって有意義な活動であったと考えますか？」の質問に，2 人とも「有意義だった」と回答している。授業では生徒 K は発言しなかったが，「有意義だった」と回答した理由として，自由記述に「実際にアメリカ人の先生に聞くことで説得力があるから」と書いている。生徒 F もアンケートの自由記述に「アメリカでも昔は歌われていたと

知ることができたから」と書いており，英語による言語活動を行った生徒の実感として，分析の視点㋓が読み取れた。

また，質問に行かなかった生徒も，アンケートの「E 先生の回答内容を仲間から授業で聞いたことは，自分にとって有意義な学習であったと考えますか？」という質問に，回答した 8 人中 7 人が「有意義だった」と回答している。その理由の自由記述には，「実際に現地で育った人から聞くことによってそっちの考えやどんなときに歌うかなど知れたから」「日本と外国の違いについて知ることができたから」など，それぞれの国の背景にある文化に対して理解が深まったことや，音楽の文化的背景の多様性をより身近に感じとったことなど，視点㋓に対して，この英語活用が有意義な活動であったと実感していることが読み取れた。「あまり有意義ではなかった」と回答した 1 名の生徒は，その理由の自由記述に「アメリカでは全地域で歌われているわけではなかったから」と記入している。つまり，言語活動自体を有意義ではなかったと判断した回答ではなく，音楽文化の多様性を感じ取った上で，国によって違ったという結果自体を有意義ではなかったと感じた回答であると読み取れるものであった。

授業後のアンケートの記述において特に注目した内容は，音楽科単独の授業では現れることのない，「実際にアメリカ人の先生に聞くことで説得力があるから」，「実際に現地で育った人から聞くことによってそっちの考えやどんなときに歌うかなど知れたから」という 2 点である。「実際に」音楽の背景にある異なる文化を経験した英語科教員から話を聞くことは，音楽科教員から同じ話を聞くことに比べて，文化的背景の理解に対して「説得力」があり，より実感を伴った理解へとつながったことがこの 2 点の記述内容からはうかがえた。

また，授業実践の協力者である英語科教員も②の英語活用を有意義であったと捉えたことが授業後に実施したアンケートから明らかとなった。E 氏に対する授業後のアンケートでは，「生徒があなたの国の音楽文化について尋ねることは，英語科教員の視点からみて有意義な活動だったと思いますか」という項目に，「Very meaningful（非常に意味があった）.」と回答があり，その理由として，「Finding out about foreign cultures is one of the best ways to promote peace, love, and understanding in the world. This kind of question is a great way to enlighten students to how different student lives are in other countries（外国の文化を知ることは，世界の平和，愛，理解を促進する最良の方法の一つです。この種の質問は，他の国での学生生活の違いを生徒に啓発する素晴らしい方法です）.」と自由記述回答があった。この結果からは，英語による言語活動が，視点㋓の「外国語の背景にある文化に対する理解を深める」ことを目標とする英語科において有効な学習活動であったことが読み取れた。

分析の視点㋒である音楽科の目標としての「音楽の多様性の理解」については，図 3 に示した言語活動用に配布したシートに記入した生徒がいなかったため，シートから分析と検証を行うこ

とができなかった。しかし授業では，このシートの質問項目にそって生徒Ｆが生徒Ｋに相談しながら発表を行った。授業記録では，生徒Ｆが「（英語科教員Ｅ氏が『Song for the Close of School』を）僕は歌ってないって（言った）」と授業で発表した際に，全体にどっと笑いがおこり，一人の生徒が「意味ないじゃん！」と発言し，日本で有名な卒業の歌はアメリカでも当然知られている，という予想が大きく外れたことに驚く様子がみられた。これは，同じ音楽でも国によって異なる扱いがされていることを理解した場面であることから，視点㋒を読み取ることができる。また，シートの質問項目２の「アメリカの生徒も卒業式で『Song for the Close of School』を歌うことがありますか？」という質問に，生徒Ｆが「あんま歌わないって。なんか，州によって歌が違うから」「なんか，学校によっても違うし」「だから，日本は long history だって」と発表したことや，質問項目３の「大抵，アメリカでは生徒は卒業式で何を歌いますか？」という項目について，「歌は歌うそうです。でも『仰げば尊し』は歌わない」と発表したことに，全体が興味深く耳を傾けていた様子がみられ，視点㋒が読み取れた。

この場面の授業記録において特に注目したのは，生徒Ｆが「long history（長い歴史）」というＥ氏の発言した英語をそのまま使用した内容である。この発言は，日本では『仰げば尊し』が卒業式において長い間歌い継がれていることに対して，Ｅ氏が「日本には（卒業式の歌に）長い歴史があるんだね」という内容を生徒Ｆに伝えたことが授業記録から読み取れる。つまり，「long history」はアメリカの音楽文化に対する発言ではなく，アメリカ人からみた日本の音楽文化についての発言である。このことからは，②の英語活用を行うことによって，英語圏諸国の音楽文化に対してアプローチするだけではなく，英語圏諸国の音楽文化から自国の音楽文化に対してアプローチされたことが確認できた。

従来の音楽科単独の授業では，日本の音楽文化から諸外国の音楽文化へのアプローチを行い，「音楽の多様性の理解」を目指す。しかし，英語科と連携し，音楽や音楽文化に関する「英語による言語活動」を取り入れた授業を行うことで，自国の音楽文化と英語圏諸国の音楽文化双方を行き来するアプローチが可能となることが確認できた。

Ⅳ　結論

1. 結果と考察

授業実践の分析の結果，㋐と㋑の分析の視点が認められ，①の「『仰げば尊し』のルーツとされる英語の歌唱曲『Song for the Close of School』を歌唱すること」が，本実践の音楽科としてのねらいである，音楽や音楽文化の多様性を理解することに対して有効な英語活用であることが明らかとなった。②の「アメリカ人の英語科教員にアメリカでの卒業式の歌唱について英語で質問

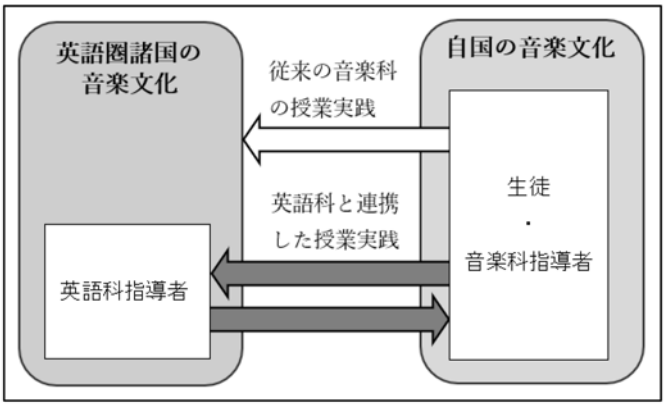


図 4　音楽科授業実践における音楽文化アプローチ

すること」については，実際に言語活動を行い，㋒と㋓の分析の視点について有効性が認められた生徒がわずか 2 名であり，この英語活用自体の有効性が認められるという結論を導き出すまでには至らなかった。しかしながら，分析の視点㋒については授業記録からその有効性が認められ，㋓については言語活動で得た内容を聞いた生徒において間接的にこの英語活用の有効性が認められ，言語活動を行った英語科教員も有効性を認めた結果となった。また，授業記録からは，英語による言語活動において，アメリカの音楽文化に対するアプローチだけではなく，アメリカの音楽文化からみた自国の音楽文化に対するアプローチがみられ，図 4 に示した通り，自国と英語圏諸国の音楽文化について双方を行き来するアプローチが可能となったことが確認された。そのため，今回実現できなかった英語科授業において「英語による言語活動」を設定することで，②の英語活用が有効性を発揮する可能性が高いと考えられる。以上の結果から，音楽文化の多様性の理解を目指す音楽科の学習において，「英語による歌唱表現」と，英語科と連携した歌唱教材に関する音楽や音楽文化についての「英語による言語活動」を取り入れた英語活用を提案したい。

また，本研究に取り入れた 2 点の英語活用に共通することは，どちらも「生徒にとって身近で関心のある対象に対して英語活用を取り入れた」ことであるといえる。①では，卒業式で歌い継がれ，生徒が関心のあった『仰げば尊し』のルーツとされる英語の歌唱曲を扱ったことで，楽曲に対する理解や思いがさらに深まった様子がみられた。②では，生徒にとって身近な存在であるネイティブスピーカーの英語科教員の出身国に関連する内容に関して，英語による言語活動を行った。そしてこれらの英語活用が，生徒にとって間近に迫った「卒業式での歌唱」という音楽文化に対する新たな視点を獲得するきっかけとなり，音楽文化の多様性や自分自身の卒業式での歌唱に込める思いを再確認することにつながった様子が見受けられた。このように，中学校音楽科授業における英語活用では，生徒にとって身近で関心のある対象に対して英語活用を取り入れ

ることが，実感を伴った音楽や音楽文化の多様性の理解に対して効果をもたらすと考えられるだろう。特に，英語歌唱の教材の選定に関しては，生徒にとって身近で関心のある楽曲や音楽文化に関連した楽曲を扱うことが，中学校音楽科授業における英語活用の可能性を広げる効果的な視点となると考える。授業実践では，生徒が初めて『仰げば尊し』のルーツとされる英語の歌唱曲を歌い終わったとき，「おおー」「すごい」という声が自然とわき上がった場面がみられた。この場面は，身近な音楽に対する視野が一気に広がった瞬間の素直な反応であったといえるだろう。英語活用を音楽科授業に取り入れる際，指導者が生徒の今知る音楽の世界を広げ，新たな視点を得ることのできる授業をつくるという発想を持つことが，今後，英語活用を取り入れた音楽科の教科内容を構築する上で必要ではないだろうか。

2. 今後の課題と展望

本研究では，英語による言語活動が，音楽科授業にとって有効であったことを生徒が実感した反面，活動に対して主体的に取り組んだ生徒が少なく，取り組んだ生徒においても，質問の回答内容を忘れて答えられなかった項目もあった。そのため，英語による言語活動を授業内で実施し，全員が活動を経験する必要があったと考える。また，今回の授業実践が全２時間扱いの限られた時数での授業であったため，英語による言語活動で扱った質問は，指導者が事前に用意したものを使用した。しかし，活動に対する意欲や積極性を引き出すためには，質問自体を生徒が考えるなど，英語による言語活動を生徒主体の活動として位置づけることで，今回の課題が改善されるのではないかと考える。音楽科授業における英語による言語活動に対して，音楽科と英語科それぞれの立場で生徒の主体性をどう引き出していくのか，今後の課題としたい。

謝辞
本研究にお力添えをいただいた授業実践協力者のＥ氏に，紙面をかりて感謝申し上げます。

《注》

（１） 文部科学省では，グローバル人材育成を目的とし，スーパーグローバルハイスクールの指定や，国際バカロレアの普及・拡大を推進している（文部科学省ホームページ https://www.mext.go.jp/a_menu/01_f.htm，2020 年 6 月 27 日閲覧）。

（２） 本研究では，外国語科の英語のみを扱うため，以下本文では，「英語科」の名称を用いる。

（３） CLIL（Content and Language Integrated Learning）とは，「教科科目などの内容とことばを統合した学習」で，学習する内容と生徒の母語ではない言葉の学習の両方を効果的に同時に促進しようと意図した学習である（笹島，2009，pp. 10-13）。

（４）「知覚」とは，「聴覚を中心とした感覚器官を通して音や音楽を判別し，意識すること」（文部科学省，2018b，p. 32）であり，「感受」とは，「音や音楽の特質や雰囲気などを感じ，受け入れること」（文部科学省，2018b，p. 32）である。音楽科の学習においては，音楽を形づくっている要素や要素同士

の関連を知覚し，それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感受しながら，知覚したことと感受したこととの関わりについて考えることが重要とされている（文部科学省，2018b，pp. 32-33）。

（5）「音楽的な見方・考え方」とは，音楽に対する感性を働かせ，音や音楽を，音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え，自己のイメージや感情，生活や社会，伝統や文化などと関連づける，というような，音楽科の特質に応じた物事を捉える視点や考え方であり，音楽科を学ぶ本質的な意義の中核をなすものとされている（文部科学省，2018b，p. 10-11）。

（6）　平成 29 年告示の学習指導要領では，「各学校におけるカリキュラム・マネジメントの推進」として，「教科等横断的な学習を充実することや，『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善を，単元や題材など内容や時間のまとまりを見通して行うことが求められる。」（文部科学省，2018b. pp. 4-5）と示している。

（7）　実践校の「卒業式」にあたる式典の名称は「修了式」であるが，生徒の認識では「卒業式」として位置づけられている。そのため，本研究では同義とし，「卒業式」に統一した。

（8）　本研究は，実践校校長と対象生徒の許諾を得て行った。文中の人物名は，実名とは関連のないランダムなアルファベットで示した。

（9）『Song for the Close of School』の楽曲に関して，図 1 のシートに使用した楽譜（櫻井・ゴチェフスキ・安田，2015，p. 43）の本論文への引用については出版社の許諾を得ている。

(10)　本実践では，平成 29 年告示の中学校学習指導要領の評価の観点として見込まれていた 3 観点（宮下，2018，p. 36）を用いて学習指導計画を作成した。

(11)　アンケートの回答者は対象生徒 18 名のうち 10 名であった。多数の未回答者が出た理由としては，授業内で記入する時間が取れず，授業後に各自で回答するように呼びかけたことが影響している。また，未回答者 8 名のうち 6 名は，授業実践の 4 日後に英語圏への短期留学を控えており，授業時間外でのアンケートに意識が向かなかったと考えられる。但しこの 6 名は，授業観察とワークシートの記述内容から，授業の評価規準の 3 つの観点それぞれに対して「A（十分満足できる）」または「B（おおむね満足できる）」と判断できる生徒であり，アンケートに回答した場合，ポジティブな回答をしたと想定できる。そのため，この 6 名を除いたアンケートからも有効性の検証は可能であると判断し，6 名を除く 12 名をアンケートの総数とし，分析と検証の対象とした。

(12)　本実践の授業記録では，指導者の発言や行動を「T」，生徒のそれを「S」とし，それぞれ時系列に 1 から順に数字をつけて作成した。

引用・参考文献

伊藤真，フェラン・ガリシア・ジュゼプ（2019）中学校の音楽科授業における内容言語統合型学習（CLIL）の実践 ── 器楽合奏を事例として ──．音楽文化教育学研究紀要 31，広島大学大学院教育学研究科音楽文化教育学講座，15-22.

櫻井雅人，ヘルマン・ゴチェフスキ，安田寛（2015）仰げば尊し ── 幻の原曲発見と『小学唱歌集』全軌跡．東京堂出版，3-43.

笹島茂編著（2009）CLIL 新しい発想の授業 ── 理科や英語を外国語で教える !? ──．三修社，10-13.

時得紀子，中村浩，水谷桂介（2009）クロスカリキュラムを通した表現の可能性：英語の歌を教材とした創作活動を通じて．教育実践研究 19，上越教育大学学校教育実践研究センター，9-18.

日本学校音楽教育実践学会編（2006）生成を原理とする 21 世紀音楽カリキュラム ── 幼稚園から高等学校まで ──．東京書籍，66，102.

宮下俊也（2018）平成 29 年改訂中学校教育課程実践講座　音楽．ぎょうせい，35-38.

文部科学省（2018a）中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説　外国語編．開隆堂出版，5-88.

文部科学省（2018b）中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説　音楽科．教育芸術社，4-33.

（提出日：2021 年 9 月 1 日）